

「本を読む方法について」

九州大学大学院法学研究院教授 上田 竹志

日頃からお世話になっている、DH国際書房のA氏(釣りが趣味)から、エッセイ執筆の機会をいただいた。よく考えずに引き受けた後、はたと困った。

そもそも、私はあまり本を読まない。本についての経験が乏しいのだ。自宅のスカスカの本棚には、寺山修司『書を捨てよ、町へ出よう』、ビエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』、ドリヤス工場『評判すぎる文学作品をだいたい10ページくらいの漫画で読む。』など、なぜか正統な読書から程遠いタイトルが並ぶ。小津夜景『ロゴスと巻貝』は、読書体験をめぐる美しい本だが、やや変化球。ショーペンハウエル『読書について』は、読書を称賛すると思ったら、(安易な)多読を戒める内容だった。

ひとしきり呻吟した後、自分にできることをやろう、ということになった。名著の内容を語る資格は自分にない。そこで、本を読む方法について、これも確たる知見があるわけではないものの、若干の好みを語るにとどめる。

まず、姿勢である。通常の椅子に座って長時間の読書をする、腰への負担が累積し、経験上あまり好ましくない。かといって、時代劇の武士のように、書見台に向かって姿勢を正すのも疲れる。『北斎漫画』などを見ると、机に肘を突いたり、寝そべて本を広げたりと、昔から読書スタイルは様々だったようだ。他方で、姿勢こそ精神のあり方そのものの、との見解もあり(鈴木俊隆『ビギナーズ・マインド』)、何でもよいというものでもない気もする。現時点での最善解は、某キャンプ用品メーカーのリクライニングチェアに体を預けることである。快適過ぎて、気を抜くと居眠りをしてしまう点には改善の余地があるが、それはそれで幸福でもある。

周囲の環境も大事だ。いったん机上のPCを起動すると、ひっきりなしに届く業務メールが集中を妨げる。PCもスマホも、電源を切るべきだ。だが、一時でもそんなことをすれば夥しい量のメールが溜まり、後はいくら返信をしても追いつかない破綻状態に陥ることも知っている。どちらを取っても、結局のところ精神衛生はよろしくない。気兼ねなく読書に耽るのは、退職後の贅沢なのかもしれない。

それから、窓の外の景色にも若干の注文をしたい。どんな景色がいいかは人それぞれだろうが、私について言えば、若い頃に映画「八月の鯨」を観て以来、海の見える家に憧れがある(同じ頃に観た「イル・ポストイーノ」もやはり、海辺の話だった)。窓の向こうに煌めく水平線を臨みながら読書ができれば素晴らしい。実は、現在の勤務校が田舎へと引っ越した結果、研究室の窓から遠くに海が見え、憧れを実現できる条件が奇跡的に整った。にもかかわらず、雑然とした研究室に付き物の大量の書類や段ボールなどが、せっかくの景観を台無しにしている。自分の定年までに片付くかも怪しい。

以上、私の読書方法論および環境は、現在も定まっておらず、その完成は見果てぬ夢のようである。けれどもいつか、海沿いの小さな家を手に入れて、潮騒のかすかに響く窓近く据えられた安楽椅子に身を沈め、心から気に入った本を膝元に広げると、少し黄ばんだページから柔らかな午後の光が反射され、綴られた一つ一つの文章をゆっくりと解きはぐしつづ辿るうち、知らず知らず黄金の微睡みの中へ誘われる、そういう日々が来ることを私は切に願っている。窓の外では、岩礁の突端に立って釣糸を垂れるA氏の人影が、陽炎の中に揺らいでいるだろう。